

# 観光学の確立に向けて

## Toward the establishment of tourism studies

観光研究は難しい、と定年退職間際となった今でもつくづく思う。

現在でも、「観光学」なんて存在しない。そんなものは成立しないとおっしゃる方々も多い。しかし、今は、観光学が学問の体をなしていないことは、認めるにしても、これからも「観光学」が存在しないということにはならない。観光特有の現象と課題があるなら、それに対する学問的なアプローチは必ずあると私は考えている。

なぜ難しいかと言えば、観光学固有の理論に基づいて、多くの人が気づいていない「仮説」を立てることが難しいからだ、と考えている。仮説とは、ある現象を支配する共通の原理・法則であり、まだ証明されていない理論のことであると考えているが、誰でもが分かっていることについては、当たり前過ぎて、研究の対象にはなりにくい。そのため、観光研究は、学術研究ではなくて、「調査」や「計画」のようになってしまいがちである。「調査」は、いくら詳しく、現状あるいは過去の状態を正確に調べ、記述しても、調査は調査である。「計画」は、まだ起きていないことについて自分の主張をするだけで、将来、それが現実になるかどうかは分からないから、それが正しいかどうかを検証することが不可能であり研究論文にはなりえない。学生の卒業論文のタイトルを見ても、「・・・の現状と課題」という調査レベルのもの。「・・・のあり方」「・・・の展望」など「構想・計画」レベルのものがいかに多いことか。「観光研究」の難しさの一つは、この「調査」「計画」「研究」の境が曖昧なことによると思う。

二つ目の「観光研究」の難しさは、観光は、ほとんどの人が自ら体験し、それぞれが一家言を持っていることである。観光体験の楽しさを味わうことについては、観光研究者も、それ以外の人も、大きく違うとは言いがたい。このような状況において、どのような点が観光研究者とそれ以外を区別することになるのか。観光研究者であっても、目に見えている現象をいくら詳しく観察しても、限界があることを悟らなければならないだろう。

たとえば言えば、人類は何万年の間、太陽や月や星などの天体の運行を観察してきた。しかし、たった500年ほど前にコペルニクスが地動説を理論化し、証明するまでは、ほとんどの人が地球を中心に太陽や星が回っていることを疑うことはなかった。普通に観察すると毎日、太陽が東から昇り、西に沈む。地球の周りを太陽が回っていると考えるのが普通であろう。しかし、これは今では誰でもが理解している間違いだった。同様なことが観光研究の世界でも起きていると考えている。

つまり、研究者と一般の人との違いは、誰もが見ている視点とは、異なる新しい視点から対象を観察することができること、その観察に基づいて理論仮説を立て、それを証明することができることだろう。

私自身も、天動説的視点から、観光研究を行っていたと思う。例えば、観光行動の特性から、観光需要を予測するのに、万有引力の法則をアナログ的に適用したことや多変量解析を用いた方法も試みたことがある。しかし、今では間違っていたとはっきり言うことができる。それは、観光に対する人間の考え方を理解しないまま、仮説を立てて分析を行ったからである。今なら、もう少しマシな枠組みで考えていたと思う。

天体の運行に話を戻すとコペルニクスやガリレオの地動説は、実は最終的な答ではなかった。コペルニクスの地動説は、地球が宇宙の中心なのか、あるいは太陽が宇宙の中心なのかの議論であって、真の答は、そのいずれでもなかった。太陽の質量が巨大なために地球は太陽の周りを回っているだけで、広い宇宙の中にたくさんある銀河の中の一つの銀河の一部分で起きている万有引力の法則が引き起こす現象の一つに過ぎないことが明らかになったのは、ニュートンが万有引力の法則を発見した後のことであった。

さらにニュートンの万有引力による宇宙の理解も最終的な答ではなかった。今や宇宙の成り立ちや全体像は、量子力学をはじめとする理論物理学の知識とその理解がないと始まらないのである。すべての学問は常に進歩し続けている。

天文学、物理学に見るように、最初のものとの見え方によって、まったく世界は違ったものに見える。同様に「観光学」においても、違った視点から見ると観光現象も異なった様相を見せる。自分が見ている世界が正しいと思わない方がよい。常に自分の見方を疑ってみることが必要である。そして、新しい見方を理論化する努力が大事だと思う。ただ、観光学の理論的蓄積は、少ないので、まずは他分野の理論を借りて応用することも有益だろう。他分野の理論は、その分野の課題を解決するために立てられたものであり、必ずしも役立つとは限らないが、新しい理論を発想するヒントになることも多い。しっかりとしたディシプリンを持つ研究者ほど、その既存の学問の枠を超えた冒険をしないように感じられることがある。しかし、そもそも、「観光学」という別の学問領域を打ち立てようとしているわけであるから、領域を越境することに躊躇する理由はない。

新しい学問である「観光学」を少しでも前進させるために、何が「研究」なのかを見極め、「地動説」的な視点から、専門領域を「越境」しながら研究を進めて行きたいと思う。

安 島 博 幸  
(観光デザイン学科教授)